

軍事史学

第44巻 第1号

巻頭言

戦争と芸術

芳賀 徹

イギリスの美術史家ケネス・クラーク (Kenneth Clark, 1903-1983) は、わずかに三十歳でロンドンのナショナル・ギャラリーの館長となったという俊才だった。ダ・ヴィンチ研究から風景画論やヌード論まで、ヨーロッパ美術に関する幾多の名著をあらわし、いまも広く読みつづけられているが、そのクラーク館長が一九三九年秋、第二次世界大戦の勃発とともにただちに政府に提案して実現させたのが、「戦争芸術家諮問委員会」(War Artists Advisory Committee)の組織であった。

戦争は芸術の創造性に大きく寄与する一つの契機だと考えのもとに、新旧の画家を選んで、これに前戦・銃後の戦況を描かせ、戦争の記録とするとともに国民への戦意昂揚の手段とするという方針だった。この委員会組織の趣旨を訴えて彼はこう書いたという。

「戦争によって目覚めさせられる、間違いない重要な間違ったが束の間しか続かない感情は、芸術という媒体を通してときにのみ、永遠性を付与される。——芸術家の感性こそが戦争という未曾有の体験を正しく捉え、表象する。そしてその恩恵にあずかることで大衆は〔国民は〕変容していく。」^(註)

ケネス・クラークがこのように述べたとき、彼の脳裏にどのような古典的先例が浮かんでいたのかは知るよしもない。だがたしかに、ヨーロッパでは古代ギリシャ以来、中世、ルネサンスをへて十九世紀に至るまで、多くの戦争のたびごとに幾多の彫像、記念碑、壁画、絵画の傑作がつけられては、戦場の光景をあらわし、戦勝の栄光を讃えてきた。芸術が戦争というものの悲慘と緊張と崇高をこも、ともに人類の記憶の中に永遠化してきたとは、たしかに言えることだろう。そしてそれは中国でも、戦争経験の乏しい日本においても、見られたことだった。

クラークの委員会は右の趣旨のもとに、ポール・ナッシュ、スタンリー・スベンサー、ヘンリー・ムーア、ジョン・バイパーをはじめ何十名かの画家に実際に戦争画の制作を委嘱したのだが、実は日本でも同じように陸海軍がすでに日中戦争(日支事変)の当初から太平洋戦争の末期にいたるまで、やはり何十名にも及ぶ洋画・日本画の作家たちを動員して前戦・銃後の戦争画を描かせたことは、いまでは広く知られている。二〇〇七年末には、それらの作品をよく調査・網羅した大冊の画集『戦争と美術 1937—1945』(国書刊行会)も出版された。

この画集を眺め、藤田嗣治の大作を彼の大回顧展ではじめて眺めてみると、少なくとも第二次世界大戦については日本の戦争画のほうが、多くの論者の批判にもかかわらず、たとえばクラーク委嘱の英国作家の作品などよりも質量ともに一段とすぐれていたのではないかとさえ、私は思う。単なる戦意昂揚や「大東亜」イデオロギーのプロパガンダにすぎないような作品ももちろんある。しかし、敗戦へと向かう日本未曾有の経験が熾烈であっただけに、「戦争によって目覚めさせられた感情」の昂揚は、少なくとも幾人かの画家においては、戦勝国イギリスの作家たち以上に鋭く強くなまなましく、日本美術史上かつてない戦争画の傑作を生みださせたと言える。

私は数年前、ロンドンの帝国戦争美術館でたまたま開かれていた「美術と戦争」展も見た。あの会場に日本の藤田、中村研一、北脇昇、清水登之、山口蓬春、川端龍子といった画家たちの作品を、ポール・ナッシュ以下の英国側の作品と並べて展示し、比較するという企画がいついかなるか。戦争というものの彼我共通の悲壯と悲慘をあらためて深く訴える催しとなるにちがいない、と私は考えている。

(註) 保坂健二郎「イギリスの戦争画とケネス・クラーク」(上記『戦争と美術 1937—1945』所載)より。